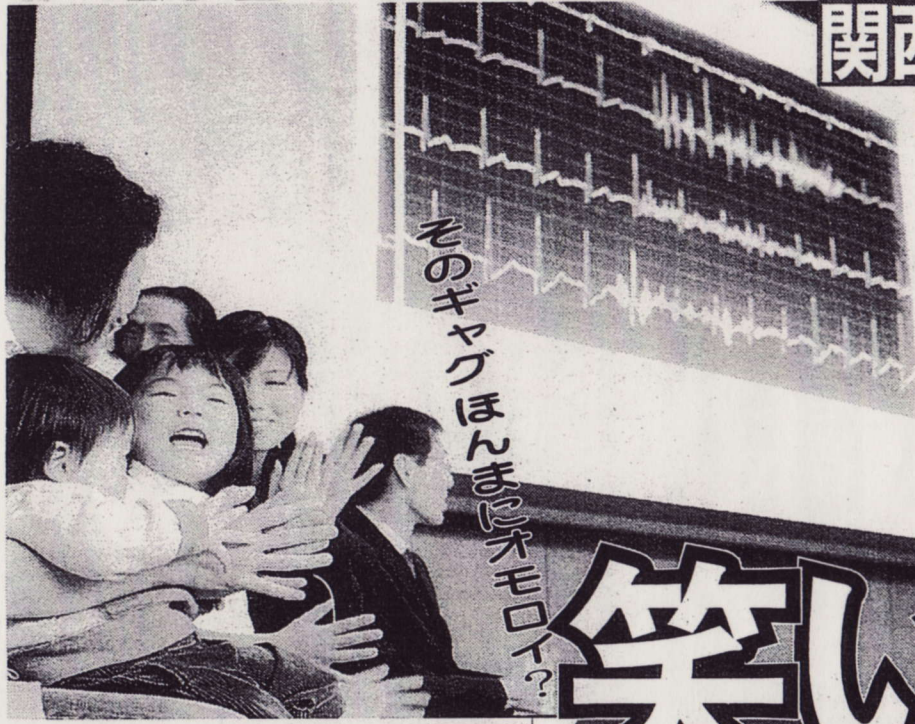


関西大教授が測定機開発

青森とタツグ、橋下知事とロボも？



そのギャグほんまにオモロイ？



笑い測定機を開発した関西大学社会学部の木村洋二教授

横隔膜の動きから、人が感じる面白さの度合いを測定して数値化する「笑いの測定機」を20日、関西大学の教授が発表した。「aH(アッハ)」という独自の新単位で表す。単なる珍企画と侮るなかれ。すでに特許申請もなされており、その上「笑いの殿堂」吉本興業との協力体制も構築。「子供が笑う街」を訴える橋下徹大阪府知事(三八)との「コラボまで視野に入れた『笑いの最終兵器』だ。

笑い測る

「笑い測定機」の画面と実験に参加して笑顔を見せる子どもら＝大阪府吹田市の関西大

「子どもが笑う」といえば、橋下知事の府知事選における選挙公約。木村教授は製品化できれば、ぜひ知事に協力を提案したいと話した。
青森から京都大学進学を期に関西に移り住み、笑いに目覚めたという木村教授。個人的な研究がお笑い界に新風を巻き起こそうだ。

横隔膜の振動を測定

お笑いコンテストなどでも「誰が本当に笑わせたのか」を正確に測定することができ、お笑い界のハードルを飛躍的に高めることになりそうだ。木村教授は「その辺は吉本さんにお任せしますが、いろいろな形でお笑いの世界にも影響すると思います」と話した。
また、近年の研究で、笑いが体内の免疫力を高める効果があることがわかってきており、笑いの数値化によって次世代医療にも役立てられるという。木村教授は、笑いによる母子の健康増進を図る「赤ちゃんとお笑い」という子育て支援プロジェクトを立ち上げる予定だ。

お笑いの街、大阪でまた新名物が誕生した。
この測定機は、木村洋二教授(六〇)が構想した。開発1年という歳月をかけて生み出した。まだ試作段階だが年内には小型化し、「わらおっち」の名で商品化することもにらんでいる。
胸付近に電極を取り付け、横隔膜の振動を皮膚表面電位によって測定。独自開発のソフトにより、その度合いと長さを数値化する。人間が「本当の笑い」に対してのみ横隔膜が反応するという、木村教授の仮説に基づいて設計された。
横隔膜の測定で「本当の笑い」を抽出し、作り笑いや愛想笑いといった「偽物の笑い」を見抜くこともできる。